

主がもたらす平安

(ヨハネ14・25〜31)

一、「わたしは戻って来る」

きょう開きました箇所には、主イエス・キリストが十字架で贖いの死を遂げられる前の晩に語られたことが、記されています。その範囲は13章より17章までです。もっとも17章は、祈りのことばですが。この、13章より17章において、14章と16章を貫いている教えは、真理の御霊、すなわち聖霊についてです。主イエスは世を去って居なくなられます。すなわち、贖いの死を遂げられます。しかし主イエスは「戻って来る」と語られました。28節です。『わたしは去って行くが、あなたがたのところに戻って来る』とわたしと言ったのを、あなたがたは聞きました。』と。それは、どういう意味なのでしょう。か。「聖霊においてあなたがたのところに戻って来る」という意味です。

主イエスは、その翌日十字架にかかって死なれます。しかしその後は真理の御霊、すなわち聖霊において御自身を現されます。ここに、神が三位一体であるということは語られていませんが、主イエスと聖霊が同じお方であることが示されています。

今日だけれど、「私はイエスさまが分かりました。私の罪のために十字架に

かかってくださったことが分かりました。私は主イエス・キリストを信じます」と決意をするなら、それは聖霊の働きであり、主イエス・キリストの働きであり、父である神の働きであると言えます。

二、「わたしの平安」

主イエスは、御自身が父のみもとに行くことを思い、すなわち十字架ですべての人の罪を背負って贖いの死を遂げることを思い、弟子たちに語られました。27節です。『わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。』と。主イエスが語られた「平安」とは何なのでしょう。ちなみに、新共同訳、フランシスコ会訳、聖書協会共同訳は、「平和」と訳出しています。したがって、両方の意味で受け取られたらよろしいです。それは、特別な平安であり、平和です。と言いますのは、続けて主は、『わたしの平安を与えます』とおっしゃっているからです。

『わたしの平安』とは、主イエスがくださる平安と平和、主イエスでなければただけない平安と平和です。さらには、『わたしは、世が与えるのと同じようには与えません』とおっしゃいます。旧新改訳は、『わたしがあなたがた

に与えるのは、世が与えるのとは違います。』と翻訳していました。無教会派の伝道者・塚本虎二先生がこんな訳をされています。『(今別れにのぞんで)平安をあなた達にのこしておく。わたしの平安をあなた達に与える。わたしが与える平安は、この世の人が『平安あれ』といのるような(言葉だけの)ものではない。(だから)心騒がせるな、気を落すな。』と。おもしろいですね。特に補足のことが興味深いですね。

主イエスが弟子たちに残された平安(平和)とは、何だったのでしょうか。

その実体は、聖霊です。26節をご覧ください。『しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。』と語られました。聖霊なる神の働きがなければ、私共は信仰生活を続けることができません。逆に言えば、聖霊の働きを知るなら、どのような状況に置かれようと、神の平安(平和)、キリストの平安(平和)をいただくことができます。なぜでしょうか。『わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。』と、主イエスがおっしゃったからです。

三、「世はわたしに対して」

主イエス・キリストが十字架の道を歩まれたのは、それが父である神の御意思にかなったことであると、知っていたからです。それが起こるに当たり、この世を支配する者、すなわち悪魔が、思いのままに行おうとしていました。しかし悪魔は、神の御計画を妨げることはできません。それどころか、人間を罪から救うという神の御計画を押し進めるための手足として用いられてしまいました。それが語られているのが、30節、31節です。『わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることができません。それは、わたしが父を愛していて、父が命じられたとおりに行っていることを、世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。』と。

この世は、未だに弱肉強食の世界であり、「神はどこにおられるのだろうか」と思いたくることが、多々あります。そういう中において主イエス・キリストを信じる者は、人間の思うところを超えて、神が良き御計画を進めて行かれると信じる者です。そう信じるために、生まれながらにして持っている思いと戦い、心の中で火花を散らすこともあるでしょう。その時、神の思いを優先させて自分の思いとするか、自分の思いを優先させるか、一人ひとりが決断を迫られることとなります。